

総合科目「言語」をめぐって

「言語」担当教官 益田 出 (英語学)
 小野原 信 善 (英語学)
 小林 賢 次 (国語学)
 山 田 勇 (露語学)

司会 総合コースが発足して8年、「言語」も昨年度まで開講されていましたが、今年度新たにコース「文学」がスタートしました。『一般教育研究』誌33号に総合科目検討委員会報告が発表されていますが、その後、そうした理念のもとに講義が編成され今日に至っています。ここで「言語」のスタッフとして、一応の区切りをつける意味で、我々の反省と、総合コースに対する多少の提言をしてみたいと思います。

先ずカリキュラムの問題から伺いたいのですが...

— 「言語」は正確には、「風土」が開講された年に“文学と風土”というテーマで英語の入江先生が加わられたのが始まりだと思います。翌45年には、現在のスタッフでは益田、小林(賢)両先生が加わりました。この講義が発足した理由は、総合コースは、出来れば複数あった方が良いことと現実的問題(学生数の調整)などが挙げられます。つまり初年度「風土」へ学生が殺到しましたが、これはこの種の講座への学生の期待が高まっていたことによるのでしょう。言語の問題も、当初、テーマとしてあがっていましたが、それ自体独立した学問分野であることが難点とされました。又「言語と～」というテーマにすると際限がないわけでして、結局「言語」の問題に関心の深い方々に参加して戴き、できる部分から取り敢えずカリキュラムを組もうということになりました。

具体的には各人の専攻からみた言語観ということで講義して戴きました。

司会 主にどのような専攻分野が選ばれたのですか。

— 第一部として、「言語とその周縁」というテーマで11月の終り頃までに人類学、民族学、社会学、心理学(幼児の言語)、地理学、国文学、生物学、

数学といった分野が取り上げられました。又第二部としては、言葉そのもの問題ということで、文字、語彙、文法、文体、意味、音韻が講義されました。

司会 学科目の壁を破るという編成にはそれなりの御苦勞もあったかと思いますが…

—— コンピューター言語の問題を担当された福岡先生の場合、予定原稿をいただく直前に亡くなられ、急遽、植松先生に代わって戴いたこともありました。

—— 多くの先生方に参加してもらいとストなどで授業が跳んだ時など遺線が大変でした。又もう一点は講師の側でも打ち合わせが不十分なため、講義が講演調になりがちで、総合コースの意を必ずしもつくさぬ場合があります。昭和45年度の第2部（言語学について）はもう少し内容を増した方がよいということもあって、昭和46年度からはカリキュラムの関連をつけることに留意しながら、語学を専攻している方々の協義で講義がすすめられました。講師（固定スタッフ）がなるべく授業に出席し講義を全体として把握するよう努めたのも、先の反省にたつてのことでした。

司会 我々がスタッフになってからカリキュラム上の問題点はどのような所にあったのでしょうか。

—— 昭和46年は殆んど一年を通じ言語学が主とする専攻領域だけでしたね。

—— この年には我々の研究会も行われたのですが、確かチョムスキーをとり上げたんでしたね。

司会 まだ大田垣先生が在職中でね、ところでこの年は結局5名で一年間を終えたので授業も一・二回の講演調という訳にはいかなかった。コマ数の上で持ち出しという気分が強かったですね。

—— 一年間に幾度も出番があつてね…(笑) 昭和46年には又、カリキュラムの内容も改められました。先ず序論と本論に分け、序論では言語観の歴史の変遷、言語研究の歴史、言語学の諸問題が、又本論では音声・音韻、文法、意味論等がとりあげられました。

司会 ということで昭和46年から5名の固定スタッフが中心となって講義が進

められましたが、我々以外に講師を募ったのは...

—— 文字の説明の際、日本語との関係で漢字の問題を中国語の小林先生にお願いしました。(昭和47年)しかし前年のスタイルはほぼ踏襲されたようです。

—— このころから言語学を主領域とする内容だけを一年続けるのは「総合」という科目の性質に必ずしもマッチしないという反省があって前期までにこれをすませ、後期は言語を取り巻く諸分野を検討しようという気運が強くなりましたね。そこで昭和49年に新たに中塚先生に御参加戴いた。更に昭和50年には、文学、文字・書道、コンピューター言語、生物学と徐々に関連領域を増やしてきました。

—— この間、講義要領を作ろうという動きがあったな。学生にとって予習や講義内容の定着の意味からも要項は必要ではないか、又講義を聞き流さぬようにということでプリントを配布したこともあった。

—— 我々として講義内容の記録という意味からも必要だということだね。

司会 出版するとすればM書店に依頼するとか、印税の話とかはスタッフが顔を合わせる度に出ましたが、一向に実現する気配がなかったようで... (笑)

—— カリキュラムの内容でみると、音声・音韻、文法等の分野を各人が担当した年と、それぞれの項目を国語や英語、中国語等について比較しつつ説明した年とがあったですね。

—— 特に音声・音韻と文字については一時間の中で数名の先生方に受け持ってもらった。多い時には3人で“出演”したこともあったね。(笑)

—— こういう形式になると総合コースとしての体裁はなしているが、講師の側からはその都度授業に出席せねばならず負担が大変ですね。

司会 授業をキメの細かいものにするには我々5名の負担も相当大きくなるということですね。ところで、学生のこの講義に対する反応ということで話をすすめたのですが、.. 資料に依りますと過去五年平均してみると100~130名程度の受講生があったようです。これは別に「言語」に限らないことですが、夏を過ぎるころから欠席が目立ちますね。

—— 昭和45年には学生から質問を提出させ終講の際に講義内容についてパネ

ルディスカッションをする予定にしていたのですが質問が一つもありませんでね。そこで最後にアンケートを取った。結果をみると“相互の関連がなかった”、“第一部の言語を取り巻く関連領域と第二部の言語学を入れ替え言語学の専門領域のことを知ってから、前者のテーマに移った方が良い”等の指摘があった。それもそうだとということになりましてね。

— 46年以降も学生にアンケートを取ったと思うがこれは感想程度でした。別に見るべきものはなかった。

— 一年目だけは学生が非常に少なくてね。当時は、前にも触れられたことですが我々全員授業に出席していたので目の前の教官を意識し、大変狼狽したのを覚えている。スタンドプレーどころでなかった。(笑)

— 別に目の前にいたわけでは... 後に座っていましたよ。(爆笑) あの年人数が少なかったのはこの講座が一般教育の人文の中に置かれていたので... 別の特定の科目に人数が集中したということもあったのですね。人気と人数の関係はとても微妙でして。(笑)

司会 総合コースといえばスタッフ間の研究と協議が中心となって運営されなければならないのしょうがなかなかそうもいかず... 本誌第三号では「言語」がその点で工夫をしているように伝えられ“汗顔の至り”というところです。我々の研究会(前述)は直接その活動を授業に反映させるというのではなくその一端が授業に現われれば良いという程度でして... 第二回目としてソシユールについてでもと思ったのですが皆さん多忙とお見受け致し... (コノアタリ苦笑)

— 言語は固定スタッフが5名ということもあってまだ意見交換は良くなされた方だと思いますよ。10名以上になると共同研究もむずかしいのでは...

司会 我々の講座は総合コースの一環として開講されたのですが、このあたりで皆さんがこの“総合”なる概念をどう捉えているかお考えを聞かせて下さい。

— その前にこの講座の一つの目標として、学生が講義をどう受け止めるかということがあろうかと思えます。学生が講義を通じて「言語」像をどう把握すべきであるかを考えさせることもこの科目を生かすもうひとつの道だと

思いますしね。勿論教官の側として一定のカリキュラムを組むのは当然であるし、その為の準備も多様な角度からなされなければなりません...

— 総合ということで一人の教官が自然科学のある分野を自分なりに理解したところで講義をするという考え方もあるでしょうし現実にこういう形で授業を進めているケースもあります。しかし我々の様に専門を異にするスタッフが担当する場合、特にトータルな受講態度が要求されるのはやむおえないのではないかと、先にも発言があった通りですが我々の側からも折にふれそうした自覚を植えつける努力もなされなければならないと思う。

司会 「総合」ということを考える上で教授者間のチームワークも大切だと思うのですが...「言語」担当スタッフと隣接領域に関して講義をお願いした教官との協議という面について考えていらっしゃる事があれば...

— これまで“兼担”していただいた方以外にもこの先生に加わって戴けたらと思うことも多かったのですが、諸般の事情により... (苦笑、アイジチアリ)

— 取り纏める方も大変で、急の間に合わせるといので、雑誌の編集者よろしく、「キリストのことば」とか...の埋め草をいつも用意していなければならないんでね。(笑) しかも学生を目の前にすれば何となく話が出てくるという手合ならまだしも、100分もギャグでということでもなければキツイですね。(一同大笑) もっとも現実にそういうことはなかったのですが気分的にどうもね...

— 我々の場合固定のスタッフで先ず^{プロフィール}全体像を作り“兼担”の方に方針を伝えるというケースが殆んどですが、これらの方々もスタッフとして企画の段階から加わって戴く方が良いのではないかと。

— 日頃からスタッフと本を読むとか接触を保つ必要があるでしょうね。不測の事態、例えばストなどで順番が狂えば失念されることもあるでしょうし、これは無理もないところでして、とにかく世話役は大変です。

司会 評価を出す際、“兼担”の方の場合全体と自分の分担部分の関係をどう表現したら良いとか、なかなか大変だと思うのですが...

— 評価の問題はむづかしい。本来なら総合に相応しい出題ということにな

- るが、そうすると全員が各講義を聴講せねばならず...
- それもあって昭和46年は全員出たのですね。結局レポートが多かった様
です。
- いずれにせよ現スタッフとしては、テスト・レポートを何回か出し可成り良心的というか綿密に評価してきましたよ。
- テストとレポートが年に7回はありますから。ただあまり細かく評価すると総合点が低くなりがちです。
- 司会** これで問題点の指摘は一応措くとして、最後に今後の方針で何か提言があれば...
- 「風土」「エネルギー」と違って「言語」は専攻として既存のものだという特色を生かすとすれば、これからの方向として、情報科学の中で自然言語として取り扱ったらどうだろう。
- 司会** かつて出された構想だと言語を入れる余地や必然性がないように思えるのですが... 現在我々が模索している言語と境界諸領域との接点を求める方向をとるといって今言われた改組も考えられるでしょうね...
- 一案だが風土との関連を今一度検討してみるのも良いと思います。
- 風土も拡充改組が考えられているようですね。いずれ今後総合コースはその編成をめぐって多様な試行錯誤が繰り返されそうです。
- 「総合」という科目の性格からして、一人でできる内容ではもったいない気がする。いずれにせよ今少し分野を拡げる必要があります。
- 先程触れられた情報科学との関係ですが、例えばコンピューターと通信工学、という具合に間口を拡げる方向であれば「言語」の拡充改組に繋がると思うのですが。
- 一方で経済学や言語学などでもコンピューターの導入という新しい極面を迎えているといえるでしょう？
- 従って、コンピューターの技術教育に終ることがないようにという点ですね、我々が危惧しているのは。
- 司会** 我々の日常生活の中で、コンピューター処理に依存している部分が可成り殖えていることもあって、このアイディアはそうした現実を先取りすると

いう意図もあると思うのですが、つまり機械に振り回されてはいけないということでした。

— それだからこそ我々の側として実学的傾向を戒める必要もあるということですね。つまり総合として考える場合、例えば言語とコンピューターという形で発想を拡げないと...

— 結局我々自身「総合」とは何かという理念がまだ充分煮つまっていないということなんじゃないかな。えらい宿題を抱えたというところですね。

司会 我々の手許である構想を描いても諸般の事情で多くの講師に自由に参加してもらおうということもできない。つい身近かな集まれる人間で授業を編成...ということになりがちです。このあたりで原点に戻って考え直さなければならぬということでしょうか。十分な結論も出せなかったのですが我々の5年間の細やかな纏めということにしたいと思います。

本日はありがとうございました。

座談会を終えて

この座談会の直前に本年度の概算要求が決定された。それに依ると本年度は一般教育の重点要求項目として総合コースの充実が謳われている。本学の一般教育の目玉商品ともいべきこのコースは、この先幾多の試練を経るであろうが、一般教育ならではの科目としてなお一層充実したものになるよう創意工夫してゆかねばならないと思う。

尚、本文は座談会の内容を山田が取り纏めたもので、必ずしも発言された諸賢の意に沿わぬ点も多々あるかと思われまふ。その責全て筆者の負うところである旨申し添えさせて戴きます。